

# 子ども読書セミナー

目的：読み聞かせの効果や家庭での読み聞かせの大切さについて知る機会とするとともに、読書ボランティア活動への理解を深める。

I 実施日：平成29年6月15日（木）	場所：伊達ふれあいセンター	参加者：38名
II 実施日：平成29年6月23日（金）	場所：福島市吾妻学習センター	参加者：48名
III 実施日：平成29年7月6日（木）	場所：二本松図書館	参加者：32名

## I 6/15（木）

### 第1部

10:05～11:00

#### 講話「子どもと読書」

講師：福島県立図書館 資料情報サービス部 主任司書 鈴木史穂 氏

#### 1 はじめに

- 子どもが本を読むことはもちろん大切である。しかし、もっと大切なことは大人が本を読んであげることである。幼少期の自らの経験から、本の世界の楽しさを味わわせてあげるとはとても大切なことである。それが、本が好きになるきっかけになる。



#### 2 子どもと本をめぐる社会の動き

1997年：学校図書館法改正（司書教諭の配置）

2000年：子ども読書年

2001年：子どもの読書活動の推進に関する法律施行（すべての子どもがあらゆる機会を通して本に親しめるようにすることが提起された）

2014年：学校図書館法改正（学校司書の配置）

- 子どもたちが身近なところで日常的に本に親しんでいくための社会の動きがある。

#### 3 子どもと読書及び情報環境

- 2015年のPISAの調査によると、科学的、数学的リテラシーに比べると読解力が低い。
- 「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」から、子どもの頃に昔話や物語などに親しんだ人は、未来や社会に対する自己肯定感が高いという結果がある。子どもの頃の読書経験は、その後の人生に大きく作用していく。
- 読書や読み聞かせの経験は、様々なことを想像できる力につながる。他人の気持ちを想像できる。
- 読書冊数の推移では、小中学生は微増だが、高校生は減少している。不読書の割合は小学生4.0%、中学生15.4%、高校生57.1%である。インターネット利用は増えているが、電子書籍の占める割合は低い。

#### 4 子ども時代の読書

- ・読み聞かせの効果は、自分の感情を言葉にできることにつながる。子ども時代に本に親しむことによって、自分のもやもやしている気持ちなどを言葉にして伝えることができるようになる。
- ・絵本「いやいやえん」や「かわいそうなぞう」を読み聞かせする適齢期はというと、内容によって適切な時期はあるかもしれないが、早すぎや遅すぎはない。そのお子さんにしっかり寄り添って、個に応じた、本の内容がじっくり入ってくる時期に読み聞かせをするのが適切である。
- ・講師の鈴木氏が挫折したときに出会った「モモ」という本がそうだったように、信頼できる先生や友達から紹介された本が、生き方や自分の考え方をよりよい方向へ導いてくれることもある。

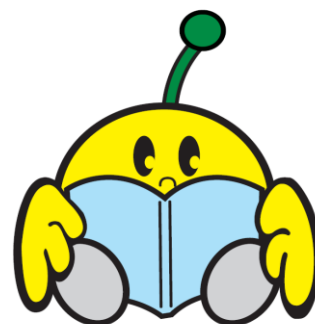


#### 5 子どもと図書館

- ・学校図書室は、交通手段もない自分で行ける図書館である。司書は本のナビゲーターであるので、子どもとの信頼関係を大切にして読書の楽しさを導いていきたい。
- ・子どもたちを見守り、接する時間を大切にしながら本の持つ素晴らしさを伝えていきたい。

#### 6 おわりに

- ・本に親しむ子どもたちを育てていくためには、まず、我々大人が本を読んでいる姿を子どもたちに見せていることも大切なことである。自分たちの生活を見直すことも大切である。
- ・絵本「よめたよ！リトル先生」のリトル先生のように、子どもを支える大人（カリズマティック・アダルト）になっていくことが大切である。読書によって得られるものは多く、自身や知識、生きることそのものにつながっていく。
- ・「物語が生きる力を育てる」 脇明子/著  
岩波書店 2008 p. 84-85 の紹介。



#### 【参考文献】

- ・「第62回読書調査」の結果（全国学校図書館協議会）
- ・「青少年のインターネット利用環境実態調査」（平成29年3月 内閣府）
- ・「低年齢層の子供のインターネット利用環境実態操作」（平成29年5月 内閣府）
- ・「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書〔概要〕」  
国立青少年教育振興機構 平成25年2月23日
- ・平成25年度全国学力・学習状況調査「保護者に対する調査」  
文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学）

## 第2部

11:05~11:55

### 事例発表及び演習

#### 「わたしたちの読み聞かせとこれからの課題」

講師：NPO 法人夢ネットワーク 代表 藍原恵美子 氏

演習：NPO 法人夢ネットワーク

#### 1 会の発足

- NPO 法人として設立してから 13 年目。母体としては、保原町中央図書館の読み聞かせボランティアからスタートしたのが始まりである。現在の会員数は 22 名で、そのうち男性は 3 名である。

#### 2 主な活動

##### • メンバーによる様々な活動

2 回の定例会でのプログラム編成を経て、おはなしのへやなどの定期的な活動をしている。また、要請に応じて活動する出前活動も行っている。

##### • メンバーによるブックスタート支援

4 ヶ月乳幼児検診で、赤ちゃんに絵本を 1 冊ずつ贈る活動を実施している。また、ブックスタート手帳の作成や「あたたかい心を育む、親と子のフェスタ」を開催している。

##### • メンバーによるアーティストとのコラボレーション

落語家、漫才師、演奏家などの芸術家やアーティストとのコラボレーションをして映像も交えて朗読会を実施している。「風のおはなし会」や「月のおはなし会」と称し、様々なプログラムを行っている。「読み聞かせが主食、アーティストはおかず、両方合わせて心の栄養になる」をモットーに実施している。

##### • メンバーと絵本作家

原画展を中心としたギャラリートークや飛び出す絵本作りのワークショップを通して、温かい心を育むための活動を行っている。

#### 3 NPO 法人としての活動

- 月 1 回ネットワークニュースを発行している。NPO 法人になったことで予算を立て、計画的に様々な事業を実施できるようになった。高齢化と男性不足が課題である。

#### 4 演習

- よみきかせ「スーホの白い馬」  
～ビオリラとのコラボレーション



#### 【参加者からの声】

- 読み聞かせだけでなく、音楽も一緒に組み合わせることによって何倍もの素晴らしいものになっていました。ただ読み聞かせるだけでなく、音楽や画像を使っただけの読書活動に挑戦したいと思いました。また、セミナーがあるときは参加したいです。



第1部

10:05~11:00

講話「子どもの読書活動の影響と効果」

講師：福島市立図書館 主任司書 猪狩美紀子 氏

1 現在の子どもの読書

- 2006年の県教育委員会「読書に関する調査」によると1ヶ月平均の読書冊数は、小中では微増である。しかし、1冊も本を読まなかった生徒の割合が小学生(4~6年)1.3%、中学生14.3%、高校生47.2%に上っている。

2 読書が子どもにもたらすもの

- 書き手との対話をするようになるので、作者が伝えたいことを推測することができる。それは、相手の気持ちを想像することにつながり、思いやりの心情が育まれていくことにつながる。
- 読書とメディアを比べると、知識を情報として得る過程において違いがある。メディアは、映像によって一瞬にして情報が入ってくる。そのため、知識の蓄積にはつながらない。しかし、読書は自分の理解のスピードに応じて何度も立ち止まって読むことができる。結果的にじっくり入った知識や感性は自分自身の中で残っていく。

3 物語がもたらすもの

- 実体験を補う深い読書体験が可能になる。楽しみながら思考力や想像力を育てていける。また、「自分の言いたいこと」を言葉でとらえられるようになり、子ども自身の世界を広げる。
- 主人公の心情を客観的に観察することができる。その経験は、自己制御できる力を育てたり、トラブルに対する望ましい対処方法が形成されたりしていく。

4 子どもの本の選び方

- 子どもが本を選ぶときには、自分が出会った範囲内で選ぶことも多い。大人が選んであげることが子どもが本当に好きな本に出会うきっかけ作りになる。
- 子どもにとってよい本とは、成功体験や達成感が感じられ、人間や世界について前向きな姿勢が持てる本である。また、想像できる余地を残している絵本も良い。

5 読み聞かせの意義

- 絵本は「大人が子どもに読んであげる本」である。読み聞かせをしてあげることで、子どもは絵と文章を目と耳で同時に味わうことができる。
- 集団での読み聞かせは、良い物語を共有することになり、新しい可能性を広げることができる。集中して聞くことができるように、感想を求めてはいけない。

6 大人が子どもの読書のためにしたいこと

- 読書の強制や押しつけはしないで、読書に親しむ気持ちや環境作りをしてほしい。本と読書に良い印象を持たせ、「読みたい」という欲求を育てるようにしたい。
- 大人が子どもの本にも興味を持ち、楽しさを共感することも大切である。思考力や読解力の向上は読書の成果としてすぐにできるものではない。おおらかに見守る気持ちが重要である。

7 おわりに

- 柳田邦男「危機的な日本の中で生きる若者たちに八カ条」を紹介



参考資料 「読む力は生きる力」「物語が生きる力を育てる」脇明子/岩波新書

「読書教育を学ぶ人のために」山元隆春/世界思想社 「読み聞かせのすすめ」波木井やよい/国土社

「キャスターという仕事」国谷裕子/岩波新書



## 事例発表及び演習

## 「読書ボランティア活動を通して」

講師：福島市子どもと本をむすぶ連絡会 会長 高森久仁子 氏

演習：福島市子どもと本をむすぶ連絡会

## 1 会の発足

- 昭和 50 年、福島市地域家庭文庫連絡会が発足。更にその活動を広く発展させるため、平成 10 年に福島市子どもと本をむすぶ連絡会に改称した。

## 2 主な活動

- 学校や学習センターのおはなし会、地域・家庭文庫などで活動しているボランティアのネットワークとして、学習会や情報交換の場を定例で開催している。個々の活動事例を発表した。

- 「信夫おひざにだっこのおはなし会 どんぐり」

信夫学習センターでおはなし会を5名で実施している。むすぶ連絡会での情報交換を行いながら細く長く続けている。

- 「渡利小学校読書ボランティア」

10名~20名で活動している。図書当番、掲示物作成、おはなし会、ブックトーク、学習会、図書オリエンテーションなど無理なく会員ができることをするようにしている。

- 「あづま子どもの本の会」

16名で学習センターや小学校での読み聞かせを主に活動しながら、定例会の学習会を行っている。吾妻学習センターのおはなし会では、司書の方と一緒に活動している。

## 3 演習「よみきかせ・わらべうた等の実践」

## 「信夫おひざにだっこのおはなし会 どんぐり」

- わらべうた 「どんぐりころちゃん」

- 絵本 「かえるぴょん」他

## 「渡利小学校ボランティア」

- 科学の本ブックトーク「進化って何？」

- 「進化のはなし~地球の命はどこからきたか」他

## 「あづま子どもの本の会」

- おはなし手袋人形「カラスの親子」

- あはなし「鳥のみじい」

## 4 まとめ

- 子どもが本を読むためには、人の手が必要である。子どもが通う学校にある学校図書館、学校司書とボランティアの連携を大切にしていきたい。一人でも多くの子どもたちが本と出会う手助けができるように活動を続けていきたい。



## 【参加者からの声】

- 仕事をしながら読書ボランティア活動は難しいでしょうか。子どもと共に過ごす時間も大切にしたいですが、何かの形で今後携わっていきたくと思っています。
- とても参考になりました。読み聞かせで実践してみたいと思いました。選ぶ本も大切だと思いました。
- 子どものようにおはなし会を楽しみました。特にカラスの親子楽しかったです。

第1部

10:05~11:00

講話「子どもの読書活動の影響と効果」

講師：二本松図書館司書 半澤順子 氏

1 二本松図書館の紹介

- ・昭和 57 年開館。絵本の楽しさを伝え、子どもたちと本をつなぐ架け橋になりたいという思いで図書館を運営している。

2 行政としての取り組み・現状

- ・二本松市子ども読書推進活動計画に基づき、家庭・地域・行政が連携を深め、子ども読書活動を推進している。
- ・平成 29 年度からは、安達地区読書活動推進委員会が「家族でいっしょに本に親しもう」と題して、家族読書の啓発を行っている。
- ・児童図書研究グループ「トトロ」との連携を図り、おはなし広場の取組や移動図書館「まつかぜ号」の活用など、様々な読書推進活動を行っている。



3 図書館や読み聞かせの現場から感じること

「移動図書館」まつかぜ号

- ・児童図書 2500 冊ほど掲載。どの子も手に取りやすく楽しい本を提供している。子どもが本に興味を持つ入り口となり、次のステップである学校図書館の利用へつながるように取り組んでいる。

「本を嫌いにさせてしまう 3 つの例」

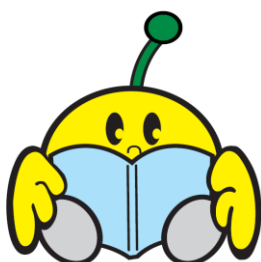
- ・子どもが本を読んでほしいと訴えたときに、親が自分の欲求を優先させてしまう事例
- ・返却にきた子どもが、もう一回同じ本を借りようとする気持ちを否定して「違う本を借りる」ことを強要してしまう事例
- ・読み聞かせ会の感想を代表生徒が準備する 경우가多いが、発表に向けての緊張で読み聞かせが楽しい会でなくなってしまう事例

「子どもは本を読んでもらいたい」

- ・子どもの気持ちに寄り添って、楽しい読書経験、体験につなげていけるように支援していくのが大人の役割である。

4 まとめ

- ・素話 アメリカの民話「黄色いリボン」を紹介



## 事例発表及び演習

## 「読書ボランティア活動を通して」

演習: 児童図書研究グループ 「トトロ」

## 1 グループの紹介

- 昭和59年設立。今年で33年目になる。17名の会員で市内の学校で読書活動を推進している。20周年、25周年、30周年にそれぞれ記念誌を発行している。



## 2 主な活動

## ・「おはなしのへや」

図書館を利用する子どもたちに絵本などの読み聞かせを行っている。毎月第1土曜日に実施している。

## ・「おはなしひろば」

会員の活動における成果を発表する場として位置づけている。パネルシアターやエプロンシアターなどの様々な手法で読み聞かせを実施している。子どもたちに読書の楽しさを味わわせるきっかけ作りを行っている。

## ・赤ちゃんのためのおはなし会「おひざにだっこ二本松」

乳幼児を持つ母親のための読書活動を行っている。母親同士のコミュニケーションがとれる交流の場にもなっている。

## ・二本松ブックスターと支援

年に10回、4ヶ月検診時に行っている。一人につき、2冊の絵本を渡している。地域みんなで子育てを支援する体制ができている。

## ・その他

出前おはなし会（小・中・高・保育所）  
各種研修会参加、定例会等



## 3 演習「よみきかせ・わらべうた等の実践」

## ・群読 「やまかつぎ」

## ・紙芝居 「みんなでぴょん」

## ・大型絵本詩 「はらぺこあおむし」

## ・おはなし 「あおいコート」

## ・パネルシアター 「ねこのおいしゃさん」

## ・エプロンシアター 「きんのがちょう」

## ・群読の練習と実践



## 4 おしまい 「みんなの拍手」



## 【参加者からの声】

- トトロさんの実演は、見ても楽しく、引き込まれました。手作りのぬくもりのある道具が素晴らしかったです。みなさんの心がこもっているのがわかりました。
- 学校で実践している読み聞かせでもパネルシアターやエプロンシアターなども取り入れてみたいと思いました。とても参考になりました。
- 一人一人の個性を生かしながら実践していくのが大切なのだと感じました。実践活動を通してのお話で分かり易かったです。ありがとうございました。